

クララ・リート・ヘボンと「ヘボン塾」

中 島 耕 二

はじめに

「ヘボン塾」という名称が文献上初めて確認されるのは、1927（昭和2）年に鷺山弟三郎氏が編纂した『明治学院五十年史』においてである。また、鷺山氏は同書で1863年に横浜居留地39番で始められた「ヘボン夫人の家塾」、これを「ヘボン塾」と称すると定義している⁽¹⁾。この鷺山説では、クララの英語クラスと同時に施療所で行われていたヘボンによる医学教育は、「ヘボン塾」の範疇に含まれないことになる。これは明治学院がヘボンの医学教育を継承していないことから、著者の鷺山氏は学院の伝統である英学教育のルーツとして「ヘボン塾」を強調するため、意図的に除外したものと思われる。

その後、「ヘボン塾」は、1876（明治9）年にジョン・C・バラ夫妻に委託されて「バラ学校」となり、やがて東京の築地居留地に移転して「築地大学校」と改称、続いて横浜先志学校と合併し「東京一致英和学校」となり、1887（明治20）年に芝白金の現在地に新校地を得て、「明治学院普通学部」として新たな出発をすることになる。

しかし、ヘボン塾の始まりについては、明治学院五十年史の英語版（1927刊）や『明治学院九十年史』（1967年刊）の編集時にすでに、

1860年には神奈川の成仏寺で「ミセス・ヘボンは神奈川に短期間滞在していた間に5人の少年からなる一クラスを教えていた」⁽²⁾こと、および「日本語の教師とわたくしどもの下僕の息子とがクラスを作って、妻が毎日午後1時間または2時間英語を教え」⁽³⁾ていることが指摘されており、鷺山氏の言う「ヘボン夫人の家塾」を「ヘボン塾」と呼ぶとすれば、その始まりは1863年ではなく1860年ということになる。

また、1876（明治9）年に「ヘボン塾」をジョン・C・バラ夫妻に委託したとされる点も、実際には男子生徒のみをバラ夫妻に任せ、女子生徒はそのままヘボン塾に残し引き続きクララが指導を行ったことから、「ヘボン塾をバラ夫妻に委託」したという表現は正確さを欠く。

明治学院大学では「ヘボン塾」をその淵源として特別な存在としているが、実はその研究に関しては、これまで学内で系統立てて研究されたことも、またそうした研究施設・機関もなく、法人の明治学院歴史資料館が関連史料の蒐集を単発的に行っている程度であり、したがって当然専任の研究者も存在せず、「ヘボン塾」の研究は進んでいないのが現実である⁽⁴⁾。偶々数十年に一回という頻度で、学院史編纂時に限られた期間、調査・研究が行われて来たに過ぎない。

そこで、本稿では今後「ヘボン塾」を学術的に継続して研究するための基礎作業として、ヘボン塾の創設者クララについて、出自を辿り、その所属するアメリカ長老教会の東洋伝道の経緯にも触れ、彼女の在日中の教育活動、すなわちヘボン塾の歴史的変遷を、『ヘボン在日書簡全集』等の先行研究および新たに筆者が発掘した史料等によって実証と補足を行い、明らかにしたい。

1. ヘボン夫妻の来日

1854年、アメリカ長老教会海外伝道局（The Board of Foreign

Missions of the Presbyterian Church in the U.S.A.) は日米和親条約締結のニュースを聞くと、在中国（清）の宣教師マッカーティー（Divie Bothune McCartee, 1820-1900）に対し、直ちに日本を訪問し宣教師派遣の可能性について調査するよう指示を与えた。しかし、一般人の日本渡航はまだ難しく、結果的にマッカーティーの来日は実現しなかった⁽⁵⁾。その4年後の1858年、日米修好通商条約が結ばれ居留地への宣教師の派遣が可能となると、海外伝道局は在中国の宣教師ジョン・L・ネビアス（John Livingston Nevius 1829-1893）を正宣教師に、ニューヨークの医師で東洋伝道の経験のあるジェームス・C・ヘボン（James Curtis Hepburn, 1815-1911）を副宣教師にそれぞれ任命し、日本への伝道を開始した。

ヘボンは1859年4月24日、夫人のクララとともにニューヨークを出港、喜望峰を回り上海で休息を取ったのち10月17日、神奈川沖に到着し、翌18日横浜に上陸した。一方、中国杭州在住でヘボン夫妻より早く来日が期待されていたネビアスは、ヘレン夫人（Helen Sanford Coan Nevius, 1833-1910）の体調が悪化したため出発が遅れ、実際に二人が来日したのは翌1860年5月であった。こうして、アメリカ長老教会の日本伝道は、ネビアス夫妻に先行してヘボン夫妻によって神奈川の地から開始された。

当時、宣教師夫人を含め女性宣教師は按手礼⁽⁶⁾を受けていないため、聖餐式と洗礼式は司れず、その伝道活動は主として教育、福祉分野に向けられたが、クララは「はじめに」で触れた通り、来日の翌年の1860年の春には早くも成仏寺の一室で教育活動、つまり「ヘボン塾」を開始した。当時は切支丹禁制下にあり、日本人に対して直接伝道は出来なかったが、英語教材の一部として聖書の一端に触れることもあり、その意味でクララの開いたこの小さな英語クラスは、横浜地区における「ミッション・スクール」の嚆矢となり、日本におけるアメリカ長老教会によるキ

リスト教教育事業の始まり、つまり明治学院の萌芽ともなった。

2. クララの生い立ち

ヘボン塾の創設者クララ・リート・ヘボン (Clarissa Maria Leete Hepburn, 1818-1906) は、1818年6月25日、アメリカ合衆国コネチカット州ギルフォード (Guilford) で、父ハービー・リート (Harvy Leete, 1797～1852) 21歳、母サリー・フォウラー・リート (Sally Fowler Leete, 1800～1820) 17歳の長女 (長子) として生まれた⁽⁷⁾。正式名はクラリッサ・マリア・リート (Clarissa Maria Leete, 1818～1906) と言う。生家のリート家はクララから数えて、7代前のウィリアム・リート (William Leete, 1612-1683) が、1639年にイングランドから北米コネチカット植民地州ニューヘブン・コロニー (New Haven Colony) に入植しアメリカの初代となった⁽⁸⁾。

ウィリアムはケンブリッジ大学を卒業し、英国国教会王室裁判所係官となりピューリタンを取り締まる側にいたが、やがて改宗して本人がピューリタン (会衆教会信徒) となり、信教の自由を求めて新大陸に渡ってきた。彼は信仰心が篤く、1643年にはギルフォード第一会衆教会 (The First Congregational Church of Guilford) の設立者の一人となり、やがて、持ち前の優れた行政能力を發揮し、コネチカット植民地州の監督官や副知事を経て、1676年に第22代コネチカット植民地州知事 (22nd Colonial Governor of Connecticut) となった。彼は惜しくも現役の知事のまま1683年に州都ハートフォードで亡くなった。二男のアンドリュー (Andrew Leete, 1643-1702) もコネチカット植民地州の行政に携わり、イエール大学 (1701年創立) のコネチカット州招致メンバーの一人でもあった。その子孫は代々ニューヘブン近郊に住み、広大な土地を所有し繁栄を誇った。現在もなお一帯にはリート通り、

リート島、リート島通りなどがあり、名門リート家の名残を留めている。

クララが3歳の時、妹のサラが生まれた。ところが、その直後、母のサリーが産後の肥立ちが悪く20歳の若さで亡くなった。父ハービーは程なくして幼い二人の娘を連れて、ノースカロライナ州ファイエットビルに移住した。この町は数年間、州都になったこともある主要な都市ではあったが、ハービーが何故遠く離れた南部のこの町に移住したのかその理由は不明である。1823年6月、父は同地でサラ・クック (Sarah Ann Cook, 1800~1871) 23歳と再婚した。クララは実母の記憶もほとんどない中で、5歳の時に継母を得たことになる。その後、クララには異母兄弟姉妹として3人の弟と一人の妹が与えられた。妹のイザベラ (Isabella A. Leete, 1830-1913?) と二番目の弟チャールズの娘レナ (Louisa Arlena Leete, 1855-1893) は、後にクララを慕ってアメリカ長老教会の女性宣教師となって来日する。

父ハービーは同町で商人として成功し、教会籍も会衆教会から長老教会に転籍し、ファイエットビル第一長老教会 (The First Presbyterian Church of Fayetteville) に所属し、1837年から亡くなる1852年まで長く筆頭長老として奉仕した。クララは故郷を離れるまでこの教会に通い、ヘボンとの結婚式もこの教会で挙げた。この教会は中国、のちに日本そして朝鮮の東洋伝道に継続的に資金援助を行ったが、その中にはクララや妹のイザベラおよび姪のレナ達の日本における伝道資金も含まれていた。

3. ヘボンとの出会い

クララは学齢期に達すると、ファイエットビル・アカデミー女子部 (Fayetteville Academy, Female Department) に入学したと思われる⁽⁹⁾。この学校はファイエットビル第一長老教会と密接な関係にあり、

当時、町で唯一の中等教育を男女に与える学校であった。女子部のカリキュラムは読み書きの他、英文法、地理、歴史、ギリシャ神話、修辭法、文学、作文法、自然哲学、植物学、裁縫、音楽、図画、フランス語、論理学、天文学、数学、幾何、代数、ギリシャ語、ラテン語の各科目が用意され、それぞれ科目毎に選抜試験があり、選択科目および選択科目数によって学費の増減があった⁽¹⁰⁾。その後、このアカデミー女子部は、1835年にファイエットビル女学校 (Fayetteville Female Seminary) として独立したが、クララの12歳年下の妹イザベラは同校を1848年に卒業している。また父のハービーは、女学校創立以来維持役員の一人として学校経営にかかわっていた。

クララは女学校の課程を修了すると、故郷を出てペンシルバニア州ノリスタウンの従兄弟の経営するノリスタウン・アカデミーの助教となった⁽¹¹⁾。当時、20歳にも満たない女性が一人遠く実家を離れ自立を目指すに至った経緯は、いろいろなことを連想させるが、その決意の背景には幼くして母と死別し、継母に育てられたクララの生い立ちが関係していたように思われる。その意味でクララは強い自立心の持ち主であると同時に、家族問題に悩みを抱える乙女でもあったと言える。こうした折に、ノリスタウンの町でクララと同じように家族との確執を抱え、進路に悩む青年医師ヘボンと出会った。二人は共通の関心事である海外伝道について語り合い、やがて将来に希望を見つけて結婚の約束を交わした⁽¹²⁾。

ところが結婚式を一ヶ月後に控えた1840年9月20日、クララと同じ両親から生まれた唯一の姉妹であった妹サラが亡くなった。母親と同じ20歳という若さであった。クララにとって、生涯の伴侶を得ると同時に最も近い肉親でもある妹との別れという、複雑な思いの門出となった。

4. 二度の東洋伝道

クララはヘボン医師と結婚し、1841年3月15日、父ハービーとアメリカ長老教会海外伝道局主事 W・ラウリーのたった二人に見送られて、ボストンの港から見知らぬ東洋の地へと出発した。ヘボン 25 歳、クララ 22 歳であった。クララはジャワ島に向かう船中で流産し、最初の滞在先シンガポールでは生後数時間で長男を亡くした。その二年後アヘン戦争終結とともに中国に移動し、アモイの地で二男サムエルを得て、ようやくヘボンの医療伝道も地について来た矢先に、クララがマラリアに感染し重症となった。マカオへの転地療養も試みられたが改善せず、そのためヘボンは遂に海外伝道を諦め本国への帰国を決意し、1845年11月30日中国を後にした。4年間の短い東洋伝道ではあったが、若いクララには精神的にも肉体的にも大きな重荷の日々であった。それでも、クララは夫に協力し二年間のシンガポール滞在の間に、前任の宣教師から引き継いだ現地の私塾で少年たちに英語と聖書を教え、いわば「シンガポール・ヘボン塾」の教師として、宣教師夫人の務めに励んだ⁽¹³⁾。

ヘボンはアメリカに帰国後ニューヨーク市で診療所を開き、やがて治療の適切さで評判を呼び患者が増えて診療所は病院に発展し、別荘を二軒も借りるまでになったが、その一方で、夫妻に新しく与えられた息子たち、チャールズ、ウォルターおよびカーティスの幼子三人を次々に失うという不幸に見舞われた。一歳から5歳の可愛い盛りの子供たちを次々に亡くした夫妻の心中は、いかばかりであったろうか。ヘボンは一歳のカーティスを失うと、実弟のスレータ牧師 (Rev. Slator Clay Hepburn, 1819-1895) に「わたしの胸ははりさけるほどだ。おおニューヨークは何と恐ろしい所であろうか。わたしに翼があったらどこか寂しい所に飛んで行きたい。これが悪しき思いならば、神よ赦したまえ」⁽¹⁴⁾

と悲痛な叫びを書き送った。クララは5歳のチャールズが召天した後、彼が生前通っていた幼稚園の教師となった。

1859年、ヘボン夫妻は13年間のニューヨークでの病院経営を打ちきり、資産を売り払い、再び東洋伝道に出発した。目的地は日本であった。この時、ヘボン44歳、クララは41歳、そして子供たちの中で唯一成長し14歳になった息子サムエルを知人に預けての来日であった。

5. クララの教育活動の開始

既に触れた通り、クララは来日の翌年3月には滞在先の成仏寺で生徒二人の英語クラスを始めたが、この英語クラスはクララが日本で始めた最初の教育活動であり、「ヘボン塾」の誕生であった。クララが来日後、逸早く授業を開始できたのは、伏線としてかつてシンガポールで地元の青少年を集め、聖書と英語を教える学校を運営した経験があったことが挙げられる。その後、この英語クラスは生徒も5人に増えたが、翌1861年6月頃、ヘボン夫妻がアメリカに残して来た息子サムエルに問題が起きたという知らせが届き、クララは同年9月17日、急遽横浜を発って本国に一時帰国したので、神奈川における「ヘボン塾」は一旦中断されることとなった。

1863年3月30日、約一年半振りにクララは日本に戻り、横浜居留地39番の新居に落ち着くと、その年の9月までに敷地内の施療所兼礼拝堂で英語クラスを再開した⁽¹⁵⁾。ヘボンは折々に医学生を指導したが、和英辞典の編纂に多くの時間を割いていたので、授業はもっぱらクララが受け持った。彼女が少年たちを対象に授業を再開した理由は、宣教師夫人として伝道的一端を担ったほかに、もう一つ特別な思いがあった。それは、13歳でクララの最初の教え子となった林董^{はやしただす}の次の述懐に示されている⁽¹⁶⁾。

When I was placed under the care of Mrs. Hepburn – and hers was very motherly care indeed, as I remember ever gratefully. (「ヘボン夫人は本当の母親の様に面倒を見て下さいました」)

クララは若き日に東洋への航海中に流産し、シンガポールでは生後数時間で長男を亡くした。本国に帰国後のニューヨークでは一歳から5歳の幼い3人の子供たちを次々に失い、そして唯一の息子サムエルもアメリカに残しての来日であった。従って、そこには当然母親としての寂寥感があったに違いない。林董に母親のように接したクララには、亡くなった子どもたちへの鎮魂とサムエルへの思いが詰まっていたのだった。

その後、ヘボン邸ではクララの英語クラスとヘボンの医学生指導それに日曜学校（バイブル・クラス）が開かれ、多くの児童・生徒・学生たちが出入りするようになった。この時期にクララのもとで英語を学んだ生徒には、林董のほか高橋是清、鈴木知雄、益田孝、早矢仕有的、三宅秀^{ひいず}、伊東保義、佐藤百太郎、沼間守一^{ぬま}ら後に日本社会で活躍する多くの俊秀たちがいた。

1860年6月に来日していたネビアス夫妻は、1861年6月、禁教下の日本での伝道を諦めて古巣の中国に戻った。アメリカでは南北戦争がはじまり、長老教会海外伝道局でも宣教師の派遣が滞っていたが、ようやく1863年5月18日、タムソン（David Thompson, 1835-1915）が単身で横浜に到着し、在日ミッションは久々に二人体制となった。タムソンは日本語を学ぶ一方自宅で英学生を指導し、1864年7月から、神奈川奉行所がヘボンの提案で運上所（税関）役人の英学教育のために開設した横浜英学所（Yokohama Academy）の教師となった。英学所では程なく教員が不足したため、ヘボン夫妻も1865年の秋から授業を引き受けることになった。

クララはそのため、ヘボン塾と横浜英学所の両方を見る時間がなくなり、家塾の英語指導をアメリカ・オランダ改革教会宣教師ジェームス・

H・バラ (James Hamilton Ballagh, 1832-1920) の夫人マーガレット (Margaret Tate Kinnier Ballagh, 1840-1909) に委託した。そして、それはヘボン夫妻が『和英語林集成』初版の印刷のため上海に長期出張し、ようやく横浜に戻って来る 1867 年 5 月まで続けられた。このように当時のヘボン塾は他教派の宣教師が指導に当たり、純粹には長老教会在日ミッションの経営ではなく、ヘボン夫妻の私塾としての性格が強いものであった。

ヘボン夫妻が上海から戻ると早速、患者が押し寄せて来たためヘボンは施療所を再開し、医学生も 8 人を迎え入れ、薬の調合の手伝いや小さな手術の助手として訓練した。一方、英語クラスは維新の動乱で横浜から青少年たちの姿が消え暫く閉じられていたが、明治新政府の基盤も固まって来る頃になると、15 人ほどの男子生徒と数人の女子生徒が通って来るようになった。

6. クララを応援した宣教師たち

1868 年 6 月に新たにコーンズ夫妻が長老教会宣教師として来日し、ヘボン宅に同居するとコーンズ (Edward Cornes, 1840-1870) は男子クラスを、夫人のエリサ (Eliza Dare Cornes, 1844? -1870) は女子クラスの応援を始めた。コーンズ夫妻はともに積極的な前向きの明るい性格で、直ちにヘボン夫妻の信頼を得た。11 月に居留地 39 番の敷地内に普請中であったもう一棟の宣教師館が完成し、コーンズ夫妻はヘボン宅から新居に移った。翌 1869 年 2 月、ヘボンは単身でアメリカに一時帰国し横浜を留守にしたが、その間の 4 月にコーンズ夫妻に長男が生まれ、7 月にはカロザース夫妻が新たな宣教師として横浜に到着しコーンズ宅に同居した。こうして横浜居留地 39 番の宣教師館は賑やかになった。カロザース (Christopher Carrothers, 1839-1921) はコーンズと

ともに男子の英語クラスを手伝うこととなり、夫人のジュリア（Julia Dodge Carrothers, 1845-1914）は、子育て中のエリサに代わって生徒が増えてきた女子クラスを応援した。

ジュリア・カロザースは、リンカーン大統領の親しい友人でアメリカ長老教会の著名な牧師であるリチャード・V・ドッジ（Richard Varick Dodge, 1821-1885）を父に、イリノイ州スプリングフィールドの地元銀行頭取の娘サーラを母とし、1845年12月25日に父の赴任先のインディアナ州プリンストンで生まれた。その後、父の転任にともないイリノイ、ウェスト・バージニアさらにペンシルバニア各州を移動したが、少女時代を過ごしたイリノイ州スプリングフィールドでは弁護士時代のリンカーン家とドッジ家が親しい間柄にあったことから、ジュリアもしばしばリンカーンと会話を交わしていた。ジュリアはウェスト・バージニア州時代に女学校に通うようになったが、一般科目に加えてドイツ語のほかギリシャ語およびラテン語を修め、高い教養を身に付け、さらに声楽および奏楽も修得した。元来聡明であったが、幼い時から父の牧会を手伝っていたことが、語学や音楽の才能を伸ばすことになった。クララの女子クラスは、才気溢れるジュリアの応援によって発展が期待されたが、夫カロザースの希望によって東京宣教区担当となることが在日ミッションで決まり、夫妻は同年10月半ば横浜を離れ東京築地に転居した。

ジュリアはその後、住まいとなった築地居留地六番A棟で、正式なアメリカ長老教会の女子教育事業として東京で最初となる長老教会女学校（通称A六番女学校）を開いた。この女学校は紆余曲折を経て、今日的女子学院へと発展した。彼女は持病があって環境の異なる外国での生活に苦しんでいたが、夫が同僚宣教師と意見の衝突を来たして宣教師を辞任すると、これを契機に1877年2月22日、単身でアメリカに帰国した。

帰国後は両親や兄弟姉妹とウィスコンシン州やカルフォルニア州に住

み、文才を発揮して日本宣教時代の経験をもとに伝道の啓蒙書を書いて過ごした。1914年3月26日、カリフォルニア州サンディエゴで亡くなった。享年68歳であった⁽¹⁷⁾。

ヘボンは1869年9月に一時帰国から横浜に戻ると、朝9時から11時まで施療所を開き、その後12時まで10人前後の医学生への指導に忙しくし、日曜日の朝には20人ほどのバイブル・クラスを指導し始めた。コーンズは翌1870年2月から大学南校（東京大学の前身校）のお雇い教師に採用が決まり、妻エリサおよび長男のエドワードを伴ない横浜を去って東京神田一ツ橋の官舎へ移った。6月には二男のハリーが生まれた。その年の8月1日早朝、コーンズ一家は夏期休暇を利用して横浜の友人を訪ねるため築地から蒸気船江戸号（City of Yedo）に乗ったが、出港後間もなくボイラーの過熱により気罐が爆発し、16名の犠牲者を出す大惨事が起こった。その中に、ハリーを除いてコーンズ夫妻、長男エドワードおよび子守りの英国人少女が含まれていた。一家の亡骸は横浜外国人墓地に埋葬された。一人残されたハリーはヘボン夫妻に引き取られ、翌1871年2月、ジュリアが一時帰国の際に預かり、本国アイオワ州の親戚の元に届けられた。ハリーは成人後、長老教会の牧師になった。

クララは、女子クラスを助けてくれたエリサ・コーンズそしてジュリア・カロザースが相前後して東京に移ったため、男女のクラスの授業を一人で切り盛りすることになった。この年の9月からアメリカ・オランダ改革教会の女性宣教師メアリー・エディ・キダー（Mary Eddy Kidder Miller, 1834-1910）が、クララの応援に来るようになった。キダーは午後1時から4時まで授業を受け持ち、その後一年近くクララの男女生徒たちの指導を続けた。やがて彼女は女子教育に集中することを希望して、男子クラスの授業を取りやめた。ヘボン夫妻は1871年11月に『和英語林集成』の第二版印刷のため再び上海に向け出発し、横浜

を留守にすることになった。キダーは一人で女子クラスを教えるうちに、生徒たちを自分の手元に置いてより完全なキリスト教教育の実施を望むようになった。

翌1872年6月21日、長老教会の新たな宣教師としてエドワード・ローゼイ・ミラー（Edward Rothesay Miller, 1843-1915）が単身で来日し、ヘボン宅に落ち着いた。ミラーはここでキダーと出会い、彼女が熱心に語る女子教育について大いに同情を示した⁽¹⁸⁾。翌年7月20日にヘボン夫妻が上海から横浜に戻ってくると、キダーは自分の生徒のための新たな教室を必要としたが、たまたま神奈川県権令の大江卓夫人がキダーの生徒であったことから、大江権令が私費で野毛山の官舎の一棟を提供してくれた。キダーは月末に女子生徒28名を連れて、居留地39番のヘボン邸から新校舎へと移った。

1873（明治6）年7月、かねてから婚約していたキダーとミラーは結婚し、その後ミラーがアメリカ・オランダ改革教会在日ミッションに転籍し、物心両面でキダーを応援した。その結果、キダーがクララから引き継いだ女子クラスは、オランダ改革教会の教育事業となり今日のフェリス女学院の源流となった。フェリスの初期生徒となった若松賤子、奥野久子、岡田鋼子、原田良子らは皆ヘボン塾以来の女子生徒であった。

7. クララの決意

ヘボン夫妻は横浜に落ち着く暇もなく同年10月本国に一時帰国し、一年後の1873年11月に横浜に戻って来た。こうしてヘボン夫妻の日常生活を追って行くと、1869年2月から1873（明治6）年11月までの足掛け5年間は、毎年のように長期間日本を留守にしており、このことからヘボン塾の授業が整備されたカリキュラムのもとで、計画的に行われる近代的学校教育とは程遠く、1860年3月に神奈川の成仏寺で始

められた手作りの家塾の延長線上にあり、随時男女生徒を集めてキリスト教を背景にした英学一般の知識を教える、ということを繰り返して来たものであった。

丁度ヘボン夫妻が日本を離れていた1873年2月24日、宣教師の念願であった切支丹禁制の高札が撤去され、キリスト教は黙認状態となったことから、これ以降欧米諸教会から新たに宣教師の派遣が相次ぎ、各派宣教師による私塾や学校の設立が急速に増加していった。キダーの野毛山の女学校も、山手に寄宿舎を備えた新校舎建築の計画を進めるまでになっていた。こうした大きなキリスト教教育の転換期に日本に戻ってきたクララは、従来の場合当たりの学校運営を改め、ヘボン塾をアメリカ長老教会在日ミッションの教育事業に組み入れ、横浜における女子教育の拡充を目指す決意をした。

それは早速実行に移され、クララは1874(明治7)年1月から全日制の学校を開始した。当初は女子教育に特化することで開校したが、男子の入学希望者が相次ぎ断ることが出来ず、結局5歳から14歳までの少年と少女合計25人の共学の学校となった。カリキュラムも一通り整えられ、英語読解、英作文、英文法、算数、地理、世界史等が12～15人にクラス分けされ、学力の程度に合わせて教えられた。ヘボンの医学クラスは再開されなかった。また入学志願者はアメリカ・オランダ改革教会在日ミッションの指導の下にある、日本基督公会(横浜海岸教会)と関係を持たないことが条件とされた。それは、表面的には生徒を横取りしたと言われることを嫌っての処置であったが、実際にはこのクララの学校がアメリカ長老教会在日ミッションの経営によるもので、オランダ改革教会が経営するキダーの女学校(フェリス女学院)やW・U・M・S(The Woman's Union Missionary Society of America for Heathen Lands)経営のアメリカン・ミッション・ホーム(横浜共立学園)と経営母体が異なることを明確にした処置であった⁽¹⁹⁾。

やがて、生徒は60人に増え前年5月に来日していたルーミス (Henry Looms, 1839-1920) と 1873 年末に来日したグリーン (Oliver Olmsby Maclean Green, 1845-1882) の二人が男子クラスの応援に加わった。同時に日曜学校も盛んになり、ヘボンは日曜日の午後 20 人の青年たちとの聖書クラスを続け、ルーミスとグリーンは最年長クラス、ルーミス夫人のジェーン (Jane Herring Greene Looms, 1845-1920) は女子クラスを、そしてクララが児童クラスを受け持った。

ジェーンは、アメリカン・ボードの総主事を 16 年間務めたデビット・グリーンの第 10 子で、1869 年にアメリカン・ボードの初代宣教師として来日したダニエル・C・グリーン (Daniel Crosby Green, 1843-1913) の 2 歳違いの妹であった。ジェーンは女学校を出たあとニューヨーク州オワスコレットの学校で、ラテン語と数学の教師を務めたが、この学校は S・R・ブラウンが創設したもので、アドリアンス (Caroline E. Adriaance, 1859 年来日)、マニヨン (Maria Manion, フルベッキ夫人, 1859 年来日)、キダー (前出)、ヘゲンボーク (S.K.M. Hegenborge, 1872 年来日) たちアメリカ・オランダ改革教会の来日女性宣教師は皆同僚の教師であった。1872 年 3 月にルーミスと結婚し、同年 5 月 24 日に夫とともにアメリカ長老教会宣教師夫人として来日した。音楽を得意とし、ヘボン塾の医学生かどやしょうこの角谷省吾にオルガン演奏を指導したことは良く知られている。

8. ヘボン塾男子部の分離

ルーミスおよびグリーンから英学および聖書の指導を受けていたヘボン塾の男子生徒の中から、受洗を望む生徒が多数生まれ、ルーミスは彼らの信仰を確認し、1874 年 7 月 5 日に 10 人の生徒に洗礼を授けた。その二ヶ月後の 9 月 13 日にさらに 7 人に授洗し、もう一人他の宣教師か

ら洗礼を受けていた信徒を加え合計 18 人によって、その日、居留地 39 番のヘボン邸内の施療所兼礼拝所において、横浜第一長老公会が設立されルーミスが仮牧師に就いた。翌 10 月にはヘボンの「日本人の教化は日本人の居住地で行うべき」との意見に従い、教会堂を湊町六丁目に移し、さらに 1875（明治 8）年 4 月には太田町二丁目へ移転した。

こうしてルーミスは直接伝道に忙しくなり、グリーンは東京宣教区へ異動、ジェーンも教師として豊富な経験を持っていたが、子育てのため時間が取れなくなり、またクララも健康に不安があることから、在日ミッションではクララの学校の男子部だけでも強化し、しかるべきキリスト教教育機関として発展させるという方針を立て、1875 年 8 月、ジェームス・H・バラの弟で横浜の高島学校や市中修文館で教師をしていたジョン・C・バラ（James Craig Ballagh, 1832-1920）を在日ミッションに迎え入れ、ルーミスおよびグリーンが教えていた男子部生徒およびジェーンとクララの男子生徒の合計 18 人を集約し、その責任者とした。バラは一部寄宿制を取り入れ、聖書学習を必修とし英語講読をはじめ英文法、英作文、数学、地理、音楽等をすべて英語で教授した。就学年齢は 17 歳から 19 歳の期間に引き上げられ、やや高等な教育が行われ授業料も若干徴収された。

ルーミスはこの頃から持病の頭痛が激しくなり、遂に宣教師を辞任し 1876（明治 9）年 4 月、一家は横浜を離れ本国に帰国した。

ヘボン夫妻は 1876 年春に山手に転居し、代わってジョン・C・バラ夫妻が山手 9 番から居留地 39 番の宣教師館に入居した。以後ヘボン塾の男子部は「バラ学校」と呼ばれるようになった。当時の生徒には石原保太郎、篠原銀蔵、太田留助、原猪作、角谷省吾、長田時行、松本源太郎、村田峰次郎、松村介石、服部綾雄、石本三十郎、成毛金次郎、折田兼至、根本正等のちに有力な牧師、教育者、実業家さらに政治家となって活躍する有為の青年たちが学んでいた。バラ学校は毎年生徒数を増や

し1880（明治13）年には60人ほどになったが、更に規模拡大を目指し同年4月に、東京築地居留地7番に新校舎を建てて移転し、築地大
学校、次いで横浜先志学校と合併し1883（明治16）年9月に東京一致
英和学校となり、1887（明治20）年に芝白金の現在地に移り明治学院
普通学部となった。

9. ヘボン塾女子部の独立

一方、クララのもとには女子生徒20人が残り、新たに5人の女生
徒を迎え入れ生徒数は増加傾向にあった。バラ夫妻の長老教会在日
ミッション加入により、ヘボン塾女子部はバラ夫人リディア（Lydia
Evelina (Benton) Ballagh, 1833-1884）の応援が期待された。

リディアは1833年にアメリカ合衆国ニューヨーク州で、ウィリアム・
カッシングとベッツィー・カッシングの娘として生まれた。アメリカ長
老教会の牧師であった夫ベントンを南北戦争で失い、1873年10月26
日にミセス・ベントン（Mrs. Benton）の名で、W・U・M・Sの宣教
師として11歳の息子のオルリー（Orlando Newell Benton Jr.）をア
メリカに残して来日し、アメリカン・ミッション・ホームの教師となっ
た。ところが暫くして、同校校長プライン（Mary Putnam Pruyn
1820-1885）とジョン・C・バラとの再婚話を巡り意見の相違を生じ⁽²⁰⁾、
その結果バラとの結婚を機に同校を辞めることになった。リディアは
1875年8月16日、ルーミスの司式でバラと結婚式を挙げ、同月30日
にアメリカ長老教会在日ミッションに夫とともに加入した。

バラ学校およびヘボン塾女子部と表裏一体の横浜第一長老公会は、建
物を転々とし定住しないため、ヘボンはこれを憂いて1876年11月26
日に住吉町二丁目23番地に木造の新会堂を建てた。教会員は40人、
教会名を横浜第一長老公会から新たに住吉町教会と改めた。リディア

は「バラ学校」を手伝う一方で、1878（明治11）年末に「お茶場（ちゃば）学校」を立ち上げて貧しい子供たちの世話を始めた。お茶場学校とは、当時山下町に多くあった輸出用お茶の焙じ工場で働く女工の子供たちを無償で面倒を見る慈善施設で、宣教師間では貧民学校と呼ばれていた。当地で働く女性は最盛期には3,000人近くもいたと言われている。リディアは1879年9月に、「私たちの『貧民学校』について一言添えなければならぬ。それは、休日を除いて、9ヶ月間中断なしに継続している。子どもたちは、決して望ましい環境下ではないにもかかわらず、私が期待していたよりもはるかに成長を遂げている。私たちは茶焙じ場が集中する近くに家を持ちたいと希望している」と本国のキリスト教伝道雑誌に投稿⁽²¹⁾している。このお茶場学校は、1880（明治13）年にバラ学校が東京に移転する際、バラ夫妻も東京へ異動となりリディアの手を離れた。またヘボン塾女子部もこの年、居留地39番から住吉町教会隣接の建物に移転が決まり、同時にお茶場学校も住吉町教会の奉仕活動の一環として取り入れられることになった。

10. クララの模索

1875年9月にインブリー（William Imbrie, 1845-1928）が夫人のエリザベス（Elizabeth Doremus Jewell Imbrie, 1845-1931）とともに来日した。インブリーは、当時長老教会在日ミッションに種々難しい問題が発生していたため、その解決および今後の神学教育の中心人物に相応しい人材として、海外伝道局から特に指名されての来日であった。夫妻は横浜山手の従兄のE・ローゼイ・ミラーの持ち家に暫く留まり、日本の状況を把握し翌年1月に東京築地に移った。エリザベスは横浜滞在中クララの学校を手伝ったが、インブリーは特別な協力はしなかった。

ヘボン塾女子部の生徒は1876（明治9）年には35人となり、クララ

にとって年齢的にも負担が増してきたことからヘボンは妻の健康を心配して、海外伝道局に専任で女子教育を担当出来る女性宣教師の派遣を要請した。もう一点クララを悩ましていたのは、クララが所属していたのは長老教会フィラデルフィア婦人伝道局であり、一方、ヘボン塾女子部はニューヨーク婦人伝道局の援助の下にあることだった。クララはこの変則状態の解消を願って、フィラデルフィア婦人伝道局会長のパーキンス夫人に学校支援の依頼状を提出したが、事態は変わらなかった。新たな女性宣教師の派遣についても海外伝道局からは反応がないため、ヘボンはクララに代わって伝道局に対し、アメリカン・ボードの在日宣教師ルーサー・ハルセー・ギューリック (Luther Halsey Gulick, 1828-1893) の娘、フランシス・ギューリック (Frances Gulick, 1854-1937) をヘボン塾担当として推薦した。

フランシスは父ルーサーの赴任先のハワイで生まれ、オハイオ州の女子長老カレッジを卒業後、1876 (明治9) 年に父と共に来日し、横浜のルーミス宅に滞在後、東京築地居留地に移り長老教会経営の新栄女学校で代用教師をしていた。豊かな教養と事務能力に優れ、明るい性格でヘボン夫妻は彼女を高く評価し、クララの学校の専任教師として横浜への転籍を大いに期待していたが実現には至らなかった。フランシスは1877 (明治10) 年に正式にアメリカ長老教会在日ミッションの宣教師に任命されたが、1880年に東京大学で化学の教授をしていたフランク・ジューエット (Frank F. Jewett 1844-1925) と結婚し、その年に夫とともにアメリカに帰国した。ジューエットはオハイオ州のオーベリン大学教授を長く務めた。フランシスは文才もあり夫の伝記など、多くの著作を残している。

海外伝道局はようやくヘボン夫妻の要望に応え、ベル・マーシュ (Belle S. Marsh, 1847-1896) を派遣して来た。マーシュは1847年にカナダのNova Scotia州 Truro で生まれ、アメリカ・オハイオ州で教育を受

けた。彼女は1876年10月31日横浜に到着し、そのままクララの学校のある居留地39番の宣教師館に向かった。早速クララに代わって女子生徒の指導を始め、同時に敷地内にあるバラ学校の教師も兼任した。彼女は来日当初の女子クラスの様子を、次のようにアメリカの家族に報告している⁽²²⁾。

私は朝食後に学校へ赴き、9時まで少女たちと歌う。学校にはオルガンがあり、少女たちはそれを嬉しく思っている。今週は学校ですっと一人でやった。日本人教師は病気で、今では彼がいないほうがやりやすい感じである。英語がわかる少女はわずか二人だけで、しかもあまり上手ではない。私はパントマイムを交えて、懸命に理解してもらおうと努力している。

彼女は前向きに仕事に向かい、クララも全幅の信頼を置いて学校業務の総てを任せることにした。マーシュは暫くすると女子クラスと男子青年クラス（バラ学校）が隣接していることは教育上好ましくないと考えるようになった。そこで彼女は女子部門を、住吉町教会の隣りの建物に移すことを在日ミッションに提案しヘボン夫妻の賛成も得た。

ヘボンは次のように伝道局に報告している⁽²³⁾。

ミス・マーシュの学校を、日本人の町の教会に移そうと思っております。少なからず問題が起こっていますので、男子の学校と女子の学校は、あまり近くてはいけないようです。

ところが、この時、在日ミッションではバラ学校の東京移転の計画が持ち上がり、女子クラスの校舎移転の話はひとまず立ち消えになった。

11. 通り過ぎる宣教師たち

1877（明治10）年12月にノックス（George William Knox, 1853-1912）、アレキサンダー（Thomas T. Alexander, 1850-1902）およびウィン（Thomas Clay Winn, 1851-1931）の若手宣教師3人が夫人同伴で来日し、ノックスとウィンは横浜で日本語を学びながらバラ学校の応援、アレキサンダーは東京宣教区配属となった。ノックスはルーミスの後任として住吉町教会の仮牧師となり、夫人のアンナ（Anna Caroline Holms Knox, 1851-1942）は、マーシュの女子クラスを手伝った。

マーシュは優れた指導力を発揮し生徒の数も40人に増え、日曜学校には毎週100人近くが出席するようになった。翌年になると生徒数も50人を超え、学校は順調に発展した。ところが彼女には定住する家が与えられず、再三在日ミッションに住宅の確保を申し出ていたが、誠意ある対応がなかったことから不満を募らせ、遂に1879（明治12）年10月にアメリカ・バプテスト教会在日ミッションの宣教師トーマス・P・ポート（Thomas P. Poate, 1848-1924）と結婚し、バプテスト教会に転籍してしまった。ヘボンは後に「ミス・マーシュをわたしどもの手から離れたのもこのためです。もしミス・マーシュにわたしどもの宣教師館の一室を世話してあげたら、バプテストに行かなかったでしょうに」⁽²⁴⁾と海外伝道局に書き送り、有能な働き手を失った原因は海外伝道局および在日ミッションの対応の悪さにあったと指摘した。

マーシュによる突然の他教派への転籍により、クララは再び生徒たちの面倒をみることになった。同時に1878年9月に来日しヘボン宅に同居し、バラ学校の教師をしていたクララの姪のレナ・A・リートが、時間を限ってヘボン塾女子部を応援することとなった。

リートは、クララの異母弟チャールズ・E・リートの長女として

1855年5月6日、ノースカロライナ州ファイエットビルで生まれたが、両親ともに早く亡くなり、天涯孤独の身となり親戚の助けで成長した。学校の成績も良く、ニューヨーク州のバッサー女子大学（Vassar College）に学び、アカデミー科を1873年に卒業した。その後、ファイエットビル近くの孤児院で教育に携わっていたがクララの招きで、アメリカ長老教会の女性宣教師となって来日した。当時数少ない高等教育を受けた女性宣教師であった。ところが、クララの学校の手伝いを始めて程なくして、築地居留地の新栄女学校の教師に不足が生じ急遽東京へ異動となり、そのためクララは再度一人で学校を守ることになった。レナはその後、1885（明治18）年2月、前年に東京の芝二本榎二丁目に岡見清致（きよむね）が開校した頌栄学校（現頌栄女子学院）に併設された頌栄英学校の教師となり、一年間務めた後、1886（明治19）年10月、アメリカ南長老教会宣教師のグリナン（R. Bryan Grinnan, 1860-1942）と結婚し、夫と共に高知、神戸の伝道に従事した。1893（明治26）年に神戸で亡くなり、神戸再度山国際墓地に埋葬された。38歳の若さであった。

12. ミス・アレキサンダーとミス・ウエスト

1880（明治13）年1月にマーシュの後任としてアレキサンダー（Caroline Tuck Alexander, 1854- ?）が横浜に派遣されて来た。彼女はペンシルバニア州ピッツバーグで生まれ、女学校を終えた後、来日前までマウント・バーノン・セミナリー（Mt. Vernon Seminary, Washington DC）で教師をしていた。アレキサンダーは横浜に到着とともに、クララの学校の再建をまかされた。彼女が最初に目にしたのは、12人ほどの女生徒が暖房もない教室に押し込まれている光景で、生徒の数も極端に減少していた。彼女は温和な性格でやや虚弱であったが教

育に熱心であった。ヘボンは「ミス・アレクザンダーは立派な働き人です。正しい判断と熱心と独立の精神を持った婦人宣教師です。わたしどもの手から奪われたくはありません」⁽²⁵⁾と評した。彼女は後年、現行『讚美歌』に残る 95 番および 479 番を作曲しているが、とりわけ音楽を得意としヘボンの見込み通り熱心に教育に取り組んだ。

同年 4 月、以前から計画されていたバラ学校の東京築地居留地への移転が決まり、バラ夫妻も学校とともに東京へ異動となり横浜居留地 39 番を離れて行った。その結果、リディアが面倒を見ていた「お茶場学校」はアレキサンダーが世話をすることになった。同年夏、バラ学校の東京移転に続いて、今度はかつてマーシュが希望していた女子部の校舎移転が在日ミッションで認められ、住吉町教会の隣接の建物に移ることになった。「お茶場学校」も継続が認められ、女子部とともに住吉町に転居した。以下はその間の経緯を示す在日ミッション会議の議事録である⁽²⁶⁾。

1880 年 7 月 26 日

(居留地) 39 番から住吉町への校舎移転にかかった金額、百ドルを認めることを可決。

ウーマンズ・ボードによる承認を条件として、建物は 25 円を超えない額で修理すること。同様に、横浜の女学校のために承認された経費の為替交換は必要とされるだけ行うことについて、その学校との関連で現在営まれている慈善学校のためにということで承認された。

アレキサンダーは女学校が住吉町に移転して間もない 1881 (明治 14) 年に、全日制学校とお茶場学校の生徒たちの様子を次のように報告している⁽²⁷⁾。

出席者は、継続的に増えていますし、その子どもたちはこの近くに住む家族の

子どもたちです。いつか自活 (Self-support) の学校にしたいと思います。(中略) 古い教室は、お茶場の施設の子どもたちのための学校として開いています。彼らは貧しい階級の子どもたちですが、多くの場合、親切な家族の子どもです。この子どもたちはもう一つの (上流の) 学校の子どもたちと比べても劣らず、とても聡明で、遠い場所に住んでいるにもかかわらず、40人以上の子どもたちが常に出席していますし、日曜学校には50人の子どもが集まっています。

ヘボン夫妻は同年3月に静養の目的で欧州に出発し、翌年1月まで横浜を留守にした。その結果、女学校はアレキサンダーの方針で運営されることになった。それまで学校の名称もマチマチであったが、この頃から「住吉学校」と言う校名が定着し、宣教師の海外伝道局への報告書にも “Sumiyoshi Day School”, “The Sumiyoshi Gakko in Yokohama”, “Sumiyoshi Mission School in Yokohama” と言った校名が度々登場してくるようになった。

ヘボン夫妻が横浜に戻った後も、アレキサンダーが責任者として学校の運営を続けたが、彼女は専任の教師がもう一人必要と海外伝道局(フィラデルフィア婦人伝道局)に要請していた。これを受けて1883(明治16)年9月にアニー・B・ウエスト (Annie Blythe West, 1862-1941) が派遣され、アレキサンダーをサポートすることになった。

ウエストは1860年2月25日、ペンシルバニア州フランクリン郡で父ウィリアム、母ジェーンの4男5女の二女(第3子)として生まれ、利発で活発な子として育ち、ニューヨーク州のパスサー女子大学に進学し1883年に卒業した。同大学の一年先輩には岩倉使節団の5人の女子留学生の一人、山川捨松がいたが彼女は東洋からの留学生として学内の有名人であったので、ウエストも当然面識があったものと思われる。当時、正規に大学を卒業した高学歴の女性宣教師はほとんどいなかった。ウエストは行動力と豊かな才能の持ち主で、教育以外にも活躍し日清、日

露戦争時には赤十字医療活動に従事し傷病兵の看護を行い、その功績によって1907（明治40）年日本政府からアメリカ人女性初の宝冠章（勲等は不明）を受賞した。1924（大正13）年に日本を去り本国に帰国したが、1931（昭和6）年にウイルソン大学（Wilson College）から法学博士の学位を受けている。

彼女は山手90番に居住し、毎日、坂を上り下りして住吉町の学校まで通った。住吉学校は、1884（明治17）年に神奈川県知事に対し「私立小学校設置願」を提出した⁽²⁸⁾。これはアメリカ長老教会と日本伝道の協力ミッション関係にあるアメリカ・オランダ改革教会が「フェリス・セミナリー」を、またW・U・M・Sが「アメリカン・ミッション・ホーム」を経営し、女子中等教育を進展させつつあったことにより、長老教会在日ミッションは横浜で女学校レベルの競争を避け、それまでの比較的広範囲の年齢層を対象にしていた学校から、男女共学の初等教育の充実に方針を転換したためと思われる。私立小学校設置願いは、当時住吉町教会牧師であった南小柿洲吾^{みながきしうご}の名義で申請された。クララはこの頃は住吉学校の校務から離れ、外国人の男女8歳から15歳の約20人に日曜日の午後、一般科目を教えていた。



Mrs. Hepburn's Class, 1885 頃 (William Elliot Griffis Collection, Special Collections and University Archives, Rutgers University Libraries 特別掲載許可)

13. ヘボン夫妻の憂鬱

1885（明治18）年7月、在日ミッションの決定でアレキサンダーとウエストは女子伝道学校（のちの聖書学館）および芝白金猿町にある頌栄女学校（Dai Machi Girls School）で教鞭を取ることになり、住まいを東京に移しアレキサンダーが週2回東京から通い、住吉小学校で教えることになった。しかし、ヘボン夫妻はミッションの決定および彼女の横浜における片手間の教育姿勢に強く反発し、次のように伝道局に書いた⁽²⁹⁾。

ミス・アレキサンダーは、週に二度東京から全日制学校に通い続けています。中央の伝道所としてはるかに重要な東京に移るために、当地を放棄したミッションの判断が誤りであったと申すつもりはありませんが、もしこの伝道所に十分な人数を置いておけるほどの人をわたしどもが持っていたら良かったと思っております。

クララはすでに67歳となり、住吉小学校の教育には手を出さなくなっていたが、住吉町教会日曜学校の教師は引き受けざるを得なくなり、リュウマチの痛みをこらえて8歳から14歳までの男女に聖書を説いた。住吉小学校の方は、週二回アレキサンダーが通いで来浜し、音楽を中心に2、3時間の授業を行い、その他の授業は日本人の教師6人が分担することとなった。しかし、このうちクリスチャンは二人だけで、本来のキリスト教教育は十分に施せなかった。やがて、一般家庭の小学課程への就学率の向上に伴い、入学児童が急増し1888（明治21）年末には270人を超えるほどとなり、補習クラスにも50人近くが学ぶ大きな学校になった。そこで教室の増築を行い、日本人教師も8人とし内5人をク

リスチャンとする改善が図られたが、ヘボンは「常任の責任者が不在ではキリスト教教育もままならない」として、海外伝道局にアレキサンダーを再び横浜に戻し、教育の効率を上げることを求めた。

14. ミス・ケイスの着任と学校の繁栄

その結果、1887年5月に来日し、アレキサンダーおよびウエストと共に頌栄女学校で教師を務め、当時丹毒に罹り健康を害して静岡県三島地方で療養していたケイス (Orietta Warne Case) が、在日ミッションの承認を得て、1890 (明治23) 年2月にアレキサンダーに代わって横浜に定住し学校の責任を担うことになった。

ケイスはニュージャージー州マウント・プリーザント (Mt. Pleasant, NJ) で生まれ、地元に近い Hightstown の女学校で一年間学び、その後同州 Lawrenceville の女学校に移り、ここで2年間勉強し優秀な成績を残して卒業した⁽³⁰⁾。ただし、両方の女学校とも現存せず、従って彼女がどんな科目を修めたかは調査できていない。また、生年月日も不明のままである。女学校を出たあとの動静ははっきりしないが、ペンシルバニア州フィラデルフィア近郊のオックスフォード (Oxford) の Oxford Presbyterian Church の支援を得て、1886年11月15日にアメリカ長老教会海外伝道局から日本派遣宣教師の任命を受けた。1887年4月16日、丁度一時帰国から日本に戻るタムソン宣教師一家と同じ City of Peking 号に乗船し、サンフランシスコの港を後にして同年5月5日横浜に着いた。

当初は、芝の頌栄女学校の教師となったが、既述の通り、体調を崩し三島に転地療養中にヘボン夫妻に請われて、住吉小学校の責任者として着任した。

1890年4月11日にクララは海外伝道局ギレスピー主事に次のように

報告している⁽³¹⁾。

あなたは、もちろん、ミス・ケイスが当地のミッションに移ったことをお聞きになりましたね。彼女は誰に恥ずることのない働き手であると判明しました。現在彼女の管理下にある280人の生徒のいる学校はうまくいっています。彼女の健康は、初めてわたしどもの所に来た時よりずっと良くなっています。彼女はわたしどもと一緒に生活しています。家族の楽しい一員であり、親切で、思慮深く、できるかぎり迷惑をかけずにおります。(略)彼女は来て以来住吉町教会で安息日学校を開いています。そうした種類の仕事に素質があるようです。始めた時には普段の出席者は30人ほどの子供でした。今は100人以上もいます。彼女が家庭を訪問することも良い結果を得ています。

ケイスが住吉小学校の責任者になることについては、アレキサンダーおよびウエストとケイスの間で感情面の問題が起こり、1890年1月の在日ミッションの会議の席上でアレキサンダーとウエストからケイスを非難する文書が読み上げられ、ケイスを責任者に推薦したヘボン夫妻もこの女性宣教師間のトラブルに巻き込まれ混乱が生じた。しかし、在日ミッションでは、これを問題視せずヘボンの提案が承認され、ケイスの住吉小学校の責任者就任が実現した。学校は一時生徒の数も減っていたが、ケイスが責任者になると生徒も更に一気に増え、半年後の8月には300人を越え、日曜学校も100～125人が出席するようになった。

ケイスは順調に学校の管理・運営を進めヘボン夫妻、とりわけ学校創立者であるクララを安心させた。ヘボン夫妻は最後の奉仕として新たな教会堂の建設を計画し、アメリカに一時帰国し熱心に募金活動を展開した結果、多額の寄付金を得、これに自己と教会員からの献金を加えて、1892(明治25)年1月尾上町六丁目に赤レンガの新会堂を建設し、住

吉町教会をここに移し新しく教会名を「指路教会」と改称して献堂した。そして、同年10月22日、高齢を理由に33年間の日本での奉仕を終えてアメリカに帰国し、ニュージャージー州イースト・オレンジに終の住処を定めた。ケイスは定期的に、本国に帰ったクララに熱心に生徒・児童たちの様子を伝え、一方クララはケイスの努力で本牧に開いた指路教会付属の日曜学校のために献金を送るなど、二人の間で親密な交流が続けられた。

ケイスは横浜地区における働きのほかに遠く佐渡に伝道旅行をしたりしていたが、ついに働き過ぎから体調を崩し、1894（明治27）年末に賜暇休暇を得て本国に一時帰国をした。翌年1月にはヘボン夫妻の住むイースト・オレンジの自宅を訪ね、二週間も宿泊して日本の様子や住吉小学校のことなどを報告して忙しく過ごした。

ケイスは1895（明治28）年11月にアメリカから横浜に戻り、住吉小学校の授業および本牧の日曜学校の奉仕に復帰するとともに指路教会の手伝いも始めたが、住吉小学校の建物の傷みが激しいことからどこか移転先が必要であるとして、海外伝道局に学校基金の増額を申請した。また、彼女の本国帰国中に住吉小学校の教育程度が低下し、今や教会付属の「保育所」になっていると訴え、教育内容の改善に努力することを報告した。

それから二年が経過した1896（明治29）年になって、住吉小学校の敷地の立ち退き問題が起きた。ヘボンは翌1897年7月2日付けの山本秀煌宛て書簡で、次のように伝えている⁽³²⁾。

ミス・ケイスがあなたと共に働いていることを聞き、住吉小学校も繁栄していることを聞いて喜んでます。学校が建っている土地を地主が別の目的に使うことを望んでいるというのは本当でしょうか。しばらく前にこのことを聞きましたが、最近は何も聞いておりません。お手紙をくださる

ときには、日本における福音伝道の進展についてすべてを知らせてください。

その後、ケイスおよび日本人関係者たちの奔走によって、敷地の明け渡しと学校の移転はうまく進み、ケイスからの手紙でそれを聞いたヘボン氏は同年10月5日付けで山本秀煌宛てに、「ミス・ケイスの学校について、住吉町の代わりに、別のふさわしい建物が見つかったこと、そしてミス・ケイスが学校のことだけに意を注いでいるとお聞きして、わたしどもはとても喜んでおります」⁽³³⁾と伝えた。

15. 文部省訓令12号とヘボン塾の終熄

ケイスはその後も横浜地区のアメリカ長老教会唯一人の宣教師として、住吉小学校の男女児童の教育と本牧を含む日曜学校を主宰していたが、1899(明治32)年8月3日に、改正条約実施と同時に公布された「私立学校令」第8条および「文部省訓令第12号」による、前者の私立小学校の禁止および後者の一般教育における宗教教育の禁止によって、二重の法規制を受けたことから、遂に1860年に神奈川成仏寺でクララによって始められ英学塾、すなわち「ヘボン塾」は39年の歴史をここに閉じた。一方で、指路教会牧師の山本秀煌や長老たちの勧めによって、ケイスは12月1日からキリスト教実業学校(Industrial School)を住吉小学校跡の建物で開校し、ケイス本人が校長となり英語と聖書の授業を担当した。学生には横浜税関吏、県庁の上級役人、高級船員、化学者など社会的に地位のある15人が登録したが、彼らは皆ケイスの日曜学校出席者であった。実務学校は暫く続けられたが、再び学校の建物の移転問題が起り、それに時を合わせてケイスの結婚が決まり、彼女は1903(明治36)年10月1日に在日ミッションを離れることになった。

そのためこの学校も同時に廃校となった。住吉小学校に関して日本側資料によると、公認小学校の資格を返上し、各種学校の「女子住吉学校」として暫く継続された⁽³⁴⁾とするものもあるが、長老教会在日ミッションの記録にはその名前を見出すことは出来ない⁽³⁵⁾。

ケイスはヘボン夫妻帰国後の1892（明治25）年から10年余り、アメリカ長老教会在日ミッションの横浜ステーション在籍の唯一の宣教師として、孤軍奮闘し伝道奉仕を続けて来たが、彼女の在日ミッション辞任により、アメリカ長老教会による横浜伝道は終りを告げた。

クララは1901（明治34）年頃から精神を病み、その症状は年々悪化し病院を転々とした。1905（明治38）年、日露戦争の外債募集にアメリカを訪れた高橋是清は、忙しい身であったが恩師のヘボン夫妻に逢うためイースト・オレンジのヘボン宅に立ち寄った。しかし、そこにはクララの姿はなく、やつれた老齢の旧師が一人いるのみであった。

クララは1906年3月4日、肺炎がもとで精神病院の一室で召天した。享年88歳であった。ヘボンは1911（明治44）年9月21日早朝、96歳で天に召された。その日、ヘボンゆかりの明治学院の寄宿舎ヘボン館が全焼したことは不思議な偶然であった。

おわりに

「ヘボン塾」は、1860年に成仏寺の一室でクララによって始められた英学教育活動から始まった。その後、「ヘボン塾」はヘボン夫妻をはじめ幾多の男性、女性宣教師がその教育を担い、男子・女子の英学、中等・初等教育、慈善学校における社会福祉事業、日曜学校における伝道および讃美歌、オルガン演奏等西洋音楽の普及など日本の近代化の一翼を担った。

ヘボン塾の最後の10年間はケイス一人の双肩にその重責が課せられ

たが、先の1899（明治32）年の「私立学校令」および「文部省訓令第12号」の公布により住吉小学校は廃校となり、やがて横浜における足掛け40年余にわたる、アメリカ長老教会の教育活動、つまり「ヘボン塾」に終止符が打たれた。

これまで「ヘボン塾」は、1876（明治9）年にヘボン夫妻からジョン・C・バラ夫妻に委託され、「バラ学校」となって発展的解消をしたとするのが定説であった。これは『明治学院五十年史』の男子の中等・高等教育を主軸とする明治学院中心の視点によるものであるが、はからずも筆者が責任編集を務めた『明治学院百五十年史』（2013年刊）も、この立場を踏襲した。しかし、本文で指摘した通り、バラ夫妻に委託された「ヘボン塾」はその一部の男子部のみであり、ヘボン夫人が指導する本流（ヘボン塾女子部）はそのまま手元に残され、引き続き「ヘボン塾」としてその後も教育が続けられたことから、従来の定説は訂正されなければならない。

ヘボン塾男子部がバラ夫妻に引き継がれ分離して行った後、ヘボン塾として残った女子部が具体的にどのような教育をして行ったのか、そして、その教育の成果としてどのようなものがあったのか、今後更に内外の新史料を発掘し、「ヘボン塾」のその詳細を明らかにしていきたい。

注

- (1) 鷺山第三郎『明治学院五十年史』（明治学院、1927年）。pp. 99～106.
- (2) G.F. フルベッキ『日本プロテスタント伝道史 明治初期諸教派の歩み〈上〉』（日本基督教会歴史編纂委員会、1984年）。p50. 原本はG.F. Verbeck, *History of Protestant Mission in Japan, Yokohama*, R. Meiklejohn & Co., 1883.
- (2) A.Oltmans, *MEIJI GAKUIN SEMI-CENTENNIAL 1877-1927*, p5. "During her brief so-journ in Kanagawa, Mrs. Hepburn taught a class

of five little boys” .

- (3) 岡部一興編, 高谷道男・有地美子訳『ヘボン在日書簡全集』(教文館, 2009年) p86. 『明治学院九十年史』 p29で高谷道男はこの史実を指摘している。
- (4) 私学における創立者および自校史に関して, 単なるアーカイブズを超えて学術研究の視点から制度化した組織と専任研究者を配置し, 最も系統だった研究を行っているのは慶應義塾の「福澤研究センター」である。本学においても筆者が提言している「ヘボン研究センター」の早急な立ち上げが望まれる。
- (5) Arthur J. Brown, *One Hundred Years, A History of Foreign Missionary Work of the Presbyterian Church in the U.S.A., with Some Account of Countries, Problems of Modern Missions*, New York, Fleming H. Revell Company, 1936. pp. 690-691.
- (6) プロテスタント教会の牧師や長老への任職の式。按手札を受けていない場合, 聖餐式および洗礼式の司式は出来ない。
- (7) Edward L. Leete, *The Family of William Leete*, Tuttle Morehouse & Taylor, Printer, 1884, New Haven. p48. このページに, クララの父ハービー・リート一家の記載がある。
- (8) Connecticut State Library, Hartford 資料。
- (9) Fayetteville Academy は 1799 年に男子部と女子部の別学制で開校され, ファイエットビル第一長老教会の管理・監督の下で運営が行われ, 同教会牧師が代々校長を務めた。こうした当時の客観的状況からクララの本校在籍は間違いないと思われるが, 当時の生徒名簿がないため断言はできない。
- (10) *History of First Presbyterian Church*, Fayetteville, North Carolina, 1928 pp. 137-138.
- (11) 当時, ノリスタウンの町には 1804 年に開校された Norristown Academy が存在していたが, この学校がクララの従兄弟が校長を務め, クララが教鞭をとった学校であったかは不明である。
- (12) W・E・グリフィス著, 佐々木晃訳『ヘボン 同時代人の見た』(教文館,

1991年) p30.

- (13) 佐々木晃「ヘボンの中国伝道(上)」『紀要』第30号(明治学院大学キリスト教研究所, 1998年2月) pp. 111 ~ 125.
- (14) 高谷道男編訳『ヘボンの手紙』増補版(有隣堂, 1978年) p28.
- (15) 1863年9月29日付けクララから海外伝道局主事 Walter Lowrie 宛ての書簡(未訳)に、「現在、董三郎(林董)を教えている」とあることから、この時点で居留地39番のクララの英語クラスが再開されていたことが確認できる。筆者が責任編集をした『明治学院百五十年史』(2013年刊)では、当時開校日を特定出来る史料が見つかっていなかったため、補足史料により1863年秋の開校としていたが、この書簡により9月以前に授業が始まっていたことの実証を得た。
- (16) 1903年1月29日付け林董からグリフィス宛て書簡(ラトガース大学グリフィス・コレクション)。また、林董は『回顧録』(1901年)に「予が十四歳の時、初て米国宣教師 Dr. J.C. Hepburn [ドクター・ジェー・シー・ヘボン] の夫人に就て学ぶ」と記録している。
- (17) 中島耕二「ジュリア・ドッジ・カロザース —女性のための女性の仕事—」『紀要』第38号(明治学院大学キリスト教研究所, 2006年) 参照。
- (18) 中島耕二「宣教師E・ローゼイ・ミラー」『あゆみ』第38号(フェリス女学院資料室, 1996年) 参照。
- (19) 岡部一興編, 高谷道男・有地美子訳『ヘボン在日書簡全集』(教文館, 2009年)。pp. 293-294.
- (20) 岡部一興編, 有地美子訳『宣教師ルーマスと明治日本』(有隣堂, 2000年)。p137.
- (21) 齋藤元子「バラ学校を支えた二人の女性—ミセス・バラとミス・マーシュの書簡—」『明治学院歴史資料館資料集』第10集①(明治学院歴史資料館 2015年) 1879年9月付け報告書簡, p46. 尚, 横浜の「お茶場学校」に関する先行研究として、内藤知美「横浜お茶場学校の成立とその意味—明治前期の保育・託児

事業の試みー』『あゆみ』第47号（フェリス女学院資料室，2001年）がある。

- (22) 同上。1876年10月31日付け書簡，p61.
- (23) 前掲注(19) p342.
- (24) 前掲注(19) p381.
- (25) 同上。
- (26) 岡部一興編，有地美子訳『G・W・ノックス書簡集』（キリスト新聞社，2006年）p76.
- (27) 前掲注(21) 内藤論文，pp. 8-9. 原本は” Woman’ s Work for Woman” No. 10, 1881, p343.
- (28) 創立百周年記念事業実行委員会編『指路教会百年の歩み』（横浜指路教会，1974年）p50. 「私立小学校設置願」の原本は未見であるので，申請の詳細は不明である。1888年の在日ミッションの年次報告書（Fifty-First Annual Report of the Board of Foreign Mission of the Presbyterian Church in the USA, May, 1888, Mission in Japan, p162. The Presbyterian Historical Society）でインブリーは，住吉町学校について「(学校が) 政府督学官から高い評価を得たことは，教育の質の高さを証明するものである」とコメントを述べている。
- (29) 前掲注(19) p 411. その後，二人は築地でヤングマンが主宰していた女子伝道学校を引き継ぎ，1885年に芝二本榎西町で全寮四年制の聖書学館（Bible Institute）を開き，1924年に二人が帰国するまで70人に及ぶ卒業生を送り出し，多くの女子伝道者および牧師夫人を育てた。
- (30) File of Miss Orietta W. Case, The Presbyterian Historical Society, Philadelphia 所蔵。
- (31) 前掲注(19) p 437.
- (32) 前掲注(19) p 471.
- (33) 前掲注(19) p 476.
- (34) 前掲注(28) pp. 51-54. 新しい建物は住吉町三丁目35番地で，後に女子住吉

学校が使用した建物と思われる。

- (35) 在日ミッションに記録がないのは、「女子住吉学校」は指路教会が管理・経営する学校となり、在日ミッションの手を離れたためと思われる。